

フランス文学概論I (今井)

学生レポート事例紹介1 (MFさん)

2007年4月18日 (水)

過去のフランス文学概論受講者の提出レポートの中から、レポート作成・論文作成のうで参考になる事例を折に触れて紹介していきたいと思います。MFさんのレポートは、まずテキストをちゃんと読んでいること＝**テキスト分析(読解)**が的確であること→**問題意識が明確であること**→**構成(序破急または起承転結)**が安定していること、以上の点(評価する側が注目する主な点)で比較的良好に出来ている事例です。

『狐物語』における教会への風刺

1. はじめに (疑問点・問題意識の明確化)

私が今回テキストとして選んだのは、中世文学の一つ『狐物語』である。これは主人公の狡猾な狐ルナルとさまざまな動物たちを描いた話で、そこには社会に対する風刺が多分に含まれている。また、この物語の特徴として、作者が一人でないことがあげられる。それと言うのも、『狐物語』は最初に作られた数話(ピエール・ド・サン=クルーという人物が作り手とされている)と、それをもとに他の人々が作り出した話(大部分は作者不明)をまとめたものだからである(著作権という概念が重要視されていなかった当時では、模倣作品を作り出すことは違法でもなく、また珍しいことでもなかった)。そのため、中には矛盾するような話もあるものの、ほとんどの話には共通の要素・展開が見られる。だがそれを踏まえたとしても、**作中で聖職者、修道院、告白といった宗教的要素が、農民・騎士・王侯貴族などの他の要素に比べ、あまりにも多く見られることが気になった**。さらにその大部分は風刺として表れている。このことについて、『狐物語の世界』を参考にしながら、自分なりに考えたことを以下に述べる。

2. 教会への風刺 (具体例の紹介と独自のテキスト分析)

まず、『狐物語』における教会への風刺には、**どのようなものがあるのか**。これについて『狐物語の世界』は、「ラテン語まじり、あるいはラテン語まじりの言葉遣いは『狐物語』でも、聖職者の言葉のなかでたびたび出てくる。それはラテン語によって彼らの権威を象徴すると同時に、それが不正確であることで、見せかけの権威を椰揄・嘲笑しているわけである」(1) (p. 172)と述べ、そうした風刺の例として、「狐、黒寺院の鳥屋に入る事」で追い詰められたルナルが修道士に吐いた次のような冒瀆的台詞をあげている。

「ああ、修道士たちはなんと残酷なやつらだ。根っからの性悪者じゃないか。どんな祈りも効き目がないとみえる。黒い服を着ているから『お坊さま』とよばれているだけじゃないか。まるで怒り狂った狂人みたいだ。いっそ『悪魔』とよんでやりたいよ。だって、悪魔も真っ黒じゃないか」(1) (p. 216)

『狐物語の世界』はこのような台詞における風刺だけを取り上げているが、教会への風刺はそれ以外の箇所でも見られる。**特に、物語の筋に風刺の効いた部分が多くあると私は思う**。その例として、「プリモオのミサの事」をあげてみる。

ある夜、狼のプリモオとルナルは教会に忍び込んで、蓄えてあった食料や酒をさんざん飲み食いする。そのうちプリモオは酔っ払って、こんなご馳走にありつけたのは神のおかげであるのだから、ミサを歌いたいと言う。そしてプリモオは酔っ払ったまま剃髪し、僧服や袈裟をまとい、鐘を鳴らして、わめくようにミサらしきものを行い始める。

これは、司祭の形骸化を椰揄しているのではないだろうか。『狐物語の世界』によると、百姓の息子が、たとえば騎士や貴族になることなどとうてい不可能な世の中であつたが、聖職には、ユダヤ教徒でさえなければどんな身分の人間もつくことができた(とある(p. 50))。すなわち、当時は素質に関係なく聖職者になることができたのである。そのため、聖職者として素晴らしい者がいる一方で、駄目な者も同じくらい、あるいはそれ以上いだろう。そしてこのことから、プリモオが司祭の格好をしてミサを行う場面は、聖職者とは、中身はどうあれ、うわべさえ整っていればよいのだ、という椰揄を表していると考えられることができるだろう。

また、この話の続きにも風刺の感じられる部分がある。プリモオがやかましいミサを行っていると、その音を聞きつけた本物の司祭が妻や同僚を連れ、棍棒などで武装して様子を見に来る。司祭は、鍵穴から中を覗いてみたが祭壇の上に立っているのが何者なのか分からない。そこで戸を開けてみるが、わめき声に怯えてすぐに閉めてしまう。そして、事態を確かめもせず、中にいるのは悪魔に違いないと思ひ込み、その場で気絶してしまう。聖職者が動物を悪魔だと思ひ込む場面は「狐とイザングラン、井戸に入る事」、「チベールと二人の司祭」、「狐と栗鼠ルーソーの事」にも見られる。これらからは、何か不可解なこと、恐ろしいことがあると、聖職者は、たいした確認もせずに二言目には「悪魔だ」と言うものだ、という椰揄を読み取ることができるのである。

3. 『狐物語』当時の教会（問題の確認、歴史的コンテキストとの関連づけ）

2. であげた例以外にも、教会への風刺は『狐物語』のいたるところで見つけることができる。では、何故これほど教会への風刺が多いのだろうか。風刺の対象になるのは大抵、権威があるものである。当時の教会は政治と密接にかかわっていたので、その条件は満たしている。しかし、1. でも述べたが、同じく権威を持つ王侯貴族への風刺よりも教会の風刺のほうが多く見られる。この原因は何であろうか。

『狐物語』に収録されている話の制作年代は1174年頃～13世紀中頃とされている。これはちょうど十字軍の時代である。『狐物語の世界』も12、13世紀の歴史的背景として、

聖ベルナルドの提唱によって第2回十字軍が聖地イエルサレムに遠征(1147年)したが、ルイ7世の率いる軍勢はバレスチナにたどりつくまでにその大半を失い、完全な失敗に終わった。それ以後、十字軍は人心をひきつける力を失っていくことになる (1) (p. 51)。

と記している。また、『狐物語』の話の中にも十字軍の影響を見ることができるものがいくつかある。例えば「狐、絞首の刑を宣告される事」で、処刑を免れるためにルナルは巡礼の旅に出ると偽る（これも逃げの手段に神聖な巡礼を使うことで教会を揶揄しているといえる）。だが、安全圏まで行くと化けの皮を現し、ライオンのノーブル王に向かって、

「王様! よく聴かれい! 土耳其皇帝ノルダンがお前さんに敬意を表して来いと、この私に頼んだのぢや! 異教徒は、私の来たのを見て皆逃げてしまつたくらゐ、お前さんを怖がってゐるんぢや!」 (2) (p. 183)

と叫ぶ。この話の推定制作年代は1179年頃とされており、第2回(1147～49)と第3回十字軍(1189～92)の間にあたる。土耳其はセルジューク＝トルコのこと、第2回十字軍の敵である。つまり、実際の第2回十字軍の結果と相反するようなことをわざと述べることで、遠征に失敗した王と教会を強烈に皮肉っているのである。

したがって、当時の教会が強大な権威を持つと共に、十字軍によって人々の信頼を失っていったことが『狐物語』における教会への風刺に拍車をかけた原因だと考えることができる。

4. まとめ

『狐物語』には多くの風刺が見られるが、特に教会に対するものが多い。それは、当時の教会が強大な権威を持っていたことと、十字軍の失敗によって人々の信頼を失っていったことの影響によるところが大きいといえる。

それにしても、サン＝クルーによる前作を踏襲しているとはいえ、さまざまな人々が描いた話の中にこれほど教会への風刺が見られることは、やはり驚くべきことである。今回の考察で、『狐物語』という庶民文学における十字軍の影響は、かくも強いものだったかということを知ることができたと思う。

参考・引用文献（一層の説得力を確保するため、できれば複数の研究書・研究論文の調査実施が望ましい）

(1) 『狐物語の世界』原野昇・鈴木覚・福本直之著、東京書籍、昭和63年初版。

(2) 『狐物語』水谷謙三訳、三學書房、昭和16年初版。

※話のタイトルは、全てこの本のものを引用した。

以上約3000字（四百字詰め原稿用紙換算7枚半）